

終戦の奉天

東京都 米田佳子

平成十六（二〇〇四）年八月十五日、終戦記念日の戦没者慰霊祭をテレビで見ている、あの日からもう五十九年も過ぎてしまったのがまるで夢のように、感慨ひとしおであった。この日一日、あれを思い、これをもって今こうして平和な日々を送っていること自体、何とも不思議な気分であらう。送ってしまった。終戦の玉音放送と一緒に聞いた両親も今は亡くなり、平凡だが不自由なく過ごしていたあの家での生活も、学生時代を楽しんだあの街のたたずまいも、所々に霞のかかった走馬灯のように、すべてが遠い遠い思い出になってしまった。思えば、あの日の正午の玉音放送を境にして、王道楽土の地、満州で暮らしていた日本人は「日僑」という名を冠せられ、中国残留邦人となったのである。

次第に敗色が濃くなってきたころから、終戦の日の前後、そして日本へ引き揚げるまでの約一年は、その日々があまりにも強烈な体験の連続であったから、決して忘れることはないと思っていた。しかし、今五十九年の歳月をさかのぼって当時のことを書き始めてみると、あいまいな記憶、思い出せないこと、前後のつながらない欠けた部分が随分あることに気が付いて驚いた。せめて両親の在世中に聞いておけば良かったと思うけれど、引き揚げ後の毎日の苦しい生活のなかで、あのころの話に触れることを、意識的に避けていたような気がしている。記憶は、年と共に加速度がついて薄れ行くことは間違いないし、あの時代を体験した世代は次第に少なくなっている現在、平和な時代に育って恵まれた世代の人に、おそらく分かってもらえないとは思うけれど、私たちの経験をいくらかでも話して、戦争による影響は戦場だけでは済まないことを知ってもらいたいと思つて、敗戦後の出来事を、わずかで断片的な記憶を掘り起こ

し書き残したいと思った。

どんな戦争でも、いったん戦争となれば個人の生活は根底から崩れ、いかなる自由もあり得ない、もちろん生命の保証すらない。戦争を、テレビの画面で他国の出来事としか感じていない若い世代の人たちに、戦争は決して絵空事ではなく、現に五十余年経った現在でも、戦争孤児という形での後遺症が残っていることを考えていただきたいと思う。

精根尽き果てて、この世の人とも思えない姿で避難する北満開拓団の人々の悲惨な有様、無謀な戦争の果てのこの光景は、未だに私の目の奥に焼きついていて、決して忘れることはない。

終戦の前年になると、奉天（瀋陽）でもB―29の空襲が始まった。飛行場を周囲に持つ工業都市の奉天には、百機以上の来襲であった。連京線の上を一直線に北上し、晴れ渡った冬の青空に飛行雲を引きながら爆音をとどろかせていた、きらきら光るB―29の大きな機体は、怖さを忘れさせ

美しいときえ思っで見上げたものだった。ときには、低空で碁盤の目のような街路を機銃掃射することもあったと聞くが、市街地は爆弾が少し落とされたくらいで、目標はやはり飛行場や工場であったらしい。発進基地は桂林と聞いたが、空襲にやってくる時間は決まって正午近くであった。

ソ満国境で日本軍が負けたとか、ソ連軍の戦車隊が国境を越えたとか、また関東軍が南方戦線に行ってしまった、満州にはいなくなったなど、いろいろな情報もどこからともなく流れてきた。縁故を頼って少しでも日本に近い所へと、大連や朝鮮方面に疎開する人が増えてきて、荷物を積んだ馬車や車の動きが激しくなった。このころには、既に汽車の切符は簡単に入手できるわけではないので、疎開する人たちはほとんどその筋に手づるがあったのだろう。街を出て行く人が多くなるにつれて、次第に空き家が目に付くようになり、残った人たちも何となく浮足立っていて、微妙な空気が漂い始めてきた。

その少し前ごろ、駅前を中心に、放射線状に作られた大通りの真ん中に、ポツンポツンと間隔をあけて四角い大きな穴が掘られていた。これは、ソ連軍の戦車がここに入ってきたときに、この穴に落ちて立ち往生させる対戦車壕と聞いたが、日本軍の姿を見なくなっていくの間にか穴掘りは中断されていて、穴はむなしく大きな口を開けたままになっていた。市街戦を予想していたのかもしれない。

不穏な空気は押さえようもなく、まもなく預金引き出しのために銀行に行列ができるようになっていった。銀行も一度に人が押し寄せたため、支払うお札が足りず、その日の分が終わると翌日というようになり、毎日朝から長い列ができていた。そんな情勢のなかで、八月十五日を迎えた。この日、重大な発表があるとのことで、いつも通りに出勤したところ、事務所は異様な雰囲気でざわついていった。まもなくお金の入った袋を渡され、「すぐ帰宅するように、そして何らかの連絡があるまでは

出勤しなくてもよい」と申し渡された。頂いたお金は、いつもの給料の額より随分多かった。そのときには理由もよく分からなかったが、後日よく考えてみると、解散手当という意味だったようだ。ともかく、事務所はこれで閉鎖されたのだった。

放送は正午というので、いつものように市街では一番にぎやかな春日町を通り抜けたが、照りつける真夏の日射しのなか、人出もなく妙にひっそりと静まりかえっていて、気味の悪い雰囲気であった。正午の放送は「ガー、ガー」と雑音が激しくて、天皇陛下のお声もはっきりと聞き取れなかったが、「……忍び難きを忍び……」というお言葉だけがはつきりと耳に残った。これから何が起るのか、負けると一体どうなるのか、想像できるわけがない。家族は、声もなくラジオの前にただ黙って座っているだけで、真夏の昼下がりにただ暑さも感じなかった。今まで聞いたことも考えたこともない敗戦という事態に、想像もつかない不安にただ体が震えるばかりであった。ラジオはこ

の放送の後、「ムクデン、ムクデン」と意味の分からない言葉を繰り返すばかりであった。「ムクデン」とは「奉天」ということかしらと考えたが、これ以後放送局が接収されたのか、この言葉を最後に日本語の放送はなくなった。この日、刑務所が開放されて釈放された囚人が奉天駅付近で不穏な行動をとり始め、銀行付近にいた日本人を追いかけたりしたという。終戦を境にして軍隊を離れた人、官公署や警察関係の人などが、今までとは立場が逆転した中国人に追われて姿を変えて逃げてきたり、終戦前に疎開ということで地方に行っていた人たちも、危険を感じて次々と奉天に戻ってきて、日本人の社会も膨らんできた。奉天にいれば、早く日本へ帰ることができると思ったからだろう。このころ日本人の組織は、従前の隣組の制度をそのまま生かして「日僑分会」として、転入や転出の報告を厳重に義務づけていた。身の危険を感じた元警察官やその筋の関係の人が、変装をして訪ねてきたり、相談にきたりすることもあ

ったが、立場の逆転した変な日本語を使う朝鮮人が急に威丈高になり、隣組の長を脅かしたり、密告したり、隣組の全員を集めてゆすったり、たかたりすることが頻発するようになり、その都度、負けた惨めさをかみしめて悔し涙を流したものである。

連行されれば、どうされるか分からないので、ただひたすらに頭を下げたお金を渡すのみであった。日が経つにつれて、明るいうちは何事もないが、夕暮れになるとどこからともなく中国人が集まってきて暴徒となつて、物資のある倉庫や大きな工場などを襲い、略奪を始めるようになった。肩に大きな荷物を担ぎ、両手にも荷を抱えた暴徒と化した群衆が、暗闇のなかをあちらこちらと走り回っていた。

その足音や話し声を、私たちは明かりのない部屋で息を殺して聞いていた。終戦と共に電気、ガス、水道などはすべて止まってしまった。私の住んでいた所は割合に奉天駅の近くでもあり、一階

は中国人の勤め人たち家族が、上階には日本人がおよそ二十世帯ぐらい住んでいた鉄筋建てのアパートであった。下の階の人たちとは、最初のころは挨拶程度のお付き合いであったが、あるときに足を痛めた中国人の奥さんに、その当時なかなか手に入りにくい薬をあげて、傷の手当を教えてあげたことから、随分と親しくなりお付き合いするようになっていて、手作りの餃子などを頂くようになった。倉庫や工場の略奪が一段落した暴徒は、今度は日本人の家を目標にするようになってきた。下の階の中国人も、自衛のために出入口を一カ所だけにして、嚴重に門を閉じ、交代で入り口の警備に立つようになった。年ごろである私を氣遣って、親切にも中国服を着せてくれて、夜は自分の家で休むようにと、かくまってくれたりしたこともあった。

道路いっぱい集まった暴徒は次第にふくれあがるばかりで、逃げようにも逃げ場のない私たちは、明かりのない部屋に頭を低くしていた。わめ

き声を聞きながらおびえる恐ろしき、そして懐中電灯で壁や天井をぐるぐる照らされる不気味さ、これは体験したことのない人には想像もできないことである。息を詰めたまま、夜の明けるのを待つ生活が何日続いた。

暴徒化した群衆がふれてくると、同じ中国人である一階の住人たちも、いつまでも持ちこたえられるものではないし、日本人をこれ以上かばうことは無理であると考えるようになってきた。上階の日本人同士で相談の上、夜は屋上に避難することに決め、夕暮れを待つて布団や当座の食べ物、それに貴重品など大切なものだけを身につけて屋上へ登って行った。屋上の登り口は一カ所だけなので、みんなが上がった後は上から嚴重に蓋をした。みんなは、這うように体を低くして、持つて上がった布団をかぶって夜明けを待った。

九月も下旬ともなると、奉天の夜の冷え込みは相当なもので、夜露は厚い布団にじっとりとしみこんでくる。どこからか銃弾が飛んできたことも

あるので、狙い撃ちされないように布団をかぶって横になっているしかなかった。

周辺の日本人の家でも襲われているらしく、暴徒やソ連兵の侵入を知らせる、洗面器やバケツを叩くけたたましい音があちらこちらから聞こえていた。火の手が上がったのも見えた。この年の仲秋の名月にあたった日は九月二十六日であったが、この夜は晴れ渡った空に大きな月が昇り輝いた。鏡のように照り映える満月を、私は布団のなかから頭だけを出して眺めているうち、思わず涙があふれて声を上げて泣き出した。いつまで続くか分からぬ今の生活を思い、この同じ月を日本でも見ているだろうに、知らせるすべもなく日本の皆はどうしているのかと思うと、このときほど日本を恋しくまた日本を遠いと思ったことはなかった。異国のなかで居場所を失った悲哀が身にしみた夜だった。

この屋上での夜の生活も長くは続かず、ある朝、暴徒が隣のビルから飛び移って襲ってきたのであ

る。男全員で棒きれなどで防戦していると、だれが知らせたのか、ピストルを持ってゲ・ペ・ウ（ソ連軍の憲兵）が救出にきてくれた。ゲ・ペ・ウのお陰で暴徒は一応ちりぢりに逃げたが、このままここにすることは危険なので、私たちは平安広場にある避難所へ行くことになった。避難所は以前平安座とっていた映画館で、当時は日僑総処の事務所になっていた。自動小銃を肩にしたソ連軍の兵隊に前後を守られ、行列を作って避難所へ向かった。さすがにだれも手出しはしなかったが、その代わり途中でたびたび行列の足を止めたのは、ほかならぬ護衛のソ連兵であった。言葉ははっきりとは分からないが、身振り手振りで日本人の靴や時計をよこせと言っていた。時計は一人一個で満足せず、ソ連兵の太い腕には幾つも幾つも巻きつけられていた。靴を脱がされた日本人は、裸足で歩くことになった。わずか十分ほどの間に、幾度立ち止まったことか。もちろんこのことは、一応礼儀正しく親切だったゲ・ペ・ウにはあずかり

知らぬことであった。

私たちのたどり着いた避難所には、既にたくさんの人が避難してきていたが、やはり近郊は危険だったのであろう。どういふ所で寝て、何を食べたか全く覚えていないが、多分コンクリートの床に寝たのではないかと思うが、食事は先に収容されていた日本人が作った物を買った覚えがあるので、その人がどこかで作って商っていたのかもしれない。そのうち暴動が少し治まってきて、昼間なら外出できるかもしれないというので、何人かが組んで元の住まいを見に行った。家は手のつけようもなく荒らされていて、あらかじめの物は持ち出されているようだった。暖房用の煙突のなかも探したようだし、神棚のお札まできれいにはがされていた。

寒くもなるし、いつまでも避難生活を続けるわけにはいかないので、幾組かの家族がまとまってここに戻り暮らすことにしたが、暮らせるようになるまで片付けるのに一週間くらいかかったが、

とりあえず寝る場所を作って生活を始めた。街の治安が完全に回復しているわけではなく、このころになると暴徒に代わってソ連兵の侵入、略奪、強姦が続発してきた。その用心のため玄関入り口を二重にし、窓という窓には板を打ち付け、ソ連兵が侵入しそうな直ちに入りに閉じられるようにするため、毎日慣れない大工仕事に精を出したものである。十月はもう冬である。さすがにストーブは持って行かなかったし、石炭は春の残りがかなりあったので、暖房には不自由しなかったが、その代わりストーブの煙突掃除や灰の始末などは大仕事であった。これが越冬生活の始まりであった。

日僑総処の手伝いをしていた父が帰国後、難民収容所設置についてのメモを残している。「昭和二十年十月二十日、奉天以北より邦人の南下する者多く、そのため収容所を設置する。収容所の救済費を日本政府の借入金として有志に出資を求めた」とある。

北満にあった開拓団の避難民が奉天にたどり着いたのは、このころのことであったと思う。ある日、前の路が騒がしいので玄関からそっとのぞいて見てみると、避難民となった北満からの開拓団の人々の南下する行列であった。髪はぼうぼうと伸びて、体には麻袋をまとい縄の帯を締め、足元はズックみたいなものをひもでくくりつけてあった。なかには目が真っ赤にただれ、あいているのかどうかも分からずふらふらと歩いている人もいた。行列のなかに、歩いている子供の姿は見掛けなかったが、背中におぶさったまま死んで既に固くなった子供を知ってか知らずか、背負ったままうつろな目をして歩いている母親もいた。行列の前後には男性が歩いていて、いずれも相当高齢の人に見えた。行列は百人近くもいたが、ときどき立ち止まりながらも、黙々と歩いていた。道の両側には中国人が大勢出ていたが、だれも声を出さず見送っていた。

私たちは外へは出られないので、戸の隙間から

見送ったが、どこをどのように歩いてきたのか、遙か北辺の地からここまで、寒さの加わった広野をさまよっての避難行を、涙無くしては見送れなかった。お互いに懸命に励まし合って、やっとここまで来たという様子で、もうこれ以上歩く気力もないという姿であった。避難の途中でも様々な危険に出会ったことであろうし、足弱な老人を手放したり、死よりも生きる道をと、子供を中国人の所に置いてきた人もいたことと思う。国策という名のもと満蒙開拓という美名によって北辺に移住させられ、終戦にいたるまで何の情報も聞かされず、いきなり放り出された人たちが、辺境の地からどんな気持ちで歩き続けてきたことか、とても言葉にはつくしがたい恐怖と苦難の道のりであったろうと、一人で考え込んでしまった。戦況不利と見ると、いち早く別行動をとった軍高官や、特別列車を仕立てて日本へ向け南下を計った役人たちの無責任さには、同じく「棄民」となった者の一人として、今もってその憤りを忘れ兼ねてい

る。

この人たちは、南五条通りにある倉庫に収容されたということであったが、長途の逃避行の疲労と避難所に収容された安堵とからであろう、ばたばたと倒れる人が多かったそうである。亡くなった人は、近くの寺の境内に穴を掘って埋葬されたと聞いた。後日外出ができるようになって寺の近くを通ったとき、荷車から降ろされた亡骸を埋葬するのに出会ったことがあった。多分同じようにして葬られたのだと思うが、土が凍って深く掘れないので、比較的浅い穴に重ねて埋葬していた。先日、奉天を訪れる機会があり、その後どうなっているのか知りたくいろいろ聞いてみたが、六十年近い歳月はその周辺を全く別のものにしてしまっていた。この開拓団難民の姿は、今まで見た日本人のもっとも悲惨な姿ではないかと思う。未だにあの姿が脳裏から離れない。

十一月下旬、結核を患っていた叔母が亡くなった。叔母の遺体は野原に穴を掘り、満鉄からもら

ってきた枕木で火葬にした。一片の骨も残さず、日本へ持って帰ってくれるように遺言したという叔母のために、丁寧に骨を拾ってあげたが、この当時は完全な火葬などではできない状態ではなかった。叔母の火葬を済ませたときあの開拓団難民の方たちのことを思わずにはいらなかった。

終戦後まもないころであったと思うが、近くの道に軍服を着た若い男性の死体があった。夏の暑い盛りの中でもあり、相当に腐乱が進んでいたが、その男性の身元を示すものは何一つ見当たらず、仕方なく使役になり出された日本人の手によって埋葬したのだが、この人にも、日本には帰ってくるのを待っている家族があるだろうに、今もって生死不明者として扱われているのだろうか。心に掛かっている。このころ日本人の組織は、転入者の身元報告がうるさく義務づけられていたが、これは多分ソ連、中国側の「お尋ね者探し」のためであったと思われる。当時転入する男性はほとんど本名を名乗らず、偽装結婚も多かった。どち

らにしても日本に帰り着くまでの方便で、手続きでも深く詮索する必要もなかった。十月十日の父のメモ書きには、「ソ連軍の命令により八月十五日現在に、軍服を着用していた者及び軍関係者は全員集合せよとの通達」とある。これがシベリア送りの序幕と思われるが、このときか、この後日のことか少し記憶が薄れているが、隣組の班を通じて、忠霊塔の清掃のため男性の使役を出すように通達があったが、このとき集まった人たちをソ連軍が周りから取り囲み、そのままシベリア送りの貨車に乗せたということも聞いている。忠霊塔の清掃の使役のことは私も記憶しているし、そのとき逃れた人の話も聞いているから本当だと思う。終戦間際になつての参戦であるにもかかわらず、非人道的なあのシベリア送りについては、占領軍同士か、または関東軍とどんな密約が交わされたのかは知らないが、全く不当だと思う。極寒不毛のシベリアでの抑留と強制労働で命を落とした多くの人たちの無念はいかばかりであつたらう。

戦後の満州に、まず入ってきたのはソ連軍の戦車隊で、外蒙古からきた粗雑な野蠻きわまりない兵隊たちであつた。マンドリンといわれていた自動小銃を抱え、靴もまともに履いていない兵隊が、およそ時計など見たことがなかったのであるが、強奪した時計を腕いっぱいにはめ込んでいるものがいた。これらの野蠻兵士はときと所をかまわず女性を追い回していたが、ソ連軍に次いで入ってきたのは、あの『卡子』（チィアーズ）という本で内情がよく知られた八路軍、ついで中華民国軍と、めまぐるしく出入りした。その都度、住民は赤い布と黄色い布を振り分けながら歓迎していた。その代わり身の早さには驚いたが、こうしたことに慣れているのか、感心するばかりであつた。アメリカ軍も進駐したかもしれないが、その姿を見ることはなかった。

治安が良くなっても、私たちは相変わらず電気ガス、水道のない生活が続けていた。終戦後から引揚げまで、日々どのように暮らしていたか、

当時のことをいろいろと考えてみたが、どうにも思い出せないことがたくさんある。電気は引揚げまでとうとうつかなかったし、ガスも同様であった。電気の代りにランプを使用したし、ガスは石炭で作ったコークスで代用し、それを使って七輪で炊事をした。今まで見たこともないランプを買ってきたのだから、ランプを売っている店があったということ、電気がない家が随分あったと思われるし、あるいは地域によるかもしれないが、電気代などの集金ができるような状態ではなかったと思う。おかげで明治時代に戻ったような気分で、ランプのほやを磨くことを覚えた。水道も出なかったの、これは近くの中国人の所へ汲みに通った。水の出る家もあったと友人に聞いたことがあったが、これは繁華街近くの進駐軍に接収された家らしく、近くの人がやはり汲みにきていたと聞いたから、全部の家で水道が使えたわけではなかったのだろう。電気、ガス、水道も使えば料金を請求されるはずだが、メーターを見た覚えも

なく、もちろん料金を支払っている覚えもない。炊事に必要な水は、石油缶をバケツ代わりに両手にいっぱいずつ毎日汲みに通った。近くではあったが凍った道を滑らないように、しかも水をこぼさないようにと運ぶのは、さすがに大変な仕事であった。一番困ったのはトイレであった。奉天市内は全部水洗トイレになっていなかったの、その始末には本当に苦労した。こんな苦労続きのなかで、食糧だけは父が終戦と同時に買い込んでいた米があったので、冬ごもりの間にも不自由せずに済み有り難かった。

治安が良くなってくると、春日町や青葉町などの繁華街には日本人の露店が並ぶようになった。ともかく生きていくためには何かしなければということと、引揚げともなればすべて捨てて行かなければならないということだから、余分なものをお金に換えるためでもあった。歩道の端に板きれを敷いて本を並べた。主に若い人や学生が多かったが、なかには珍しい本や貴重な本もあったので、

売るだけではなくお互いに交換し合って持ち帰っていた。

時間はたっぷりありながら、何もすることがない冬の夜長には、ストーブのそばでほの暗いランプの光を頼りに、一心に本を読んだ。周りは物音一つしない不思議な静けさの世界であった。このころ、暇にまかせていろいろな本を読み、随分雑学の勉強ができたと思っている。

露店には、本ばかりでなく衣類や食料品、食材などの店も出ていた。どこで仕入れるのか戦時中も見ることができなかった珍しい食材などもあり、見て歩くのも面白かった。

治安が良くなって一応平和そうに見えても、表通りから一步横道に入ると相変わらず強盗や強姦などの被害があり、男性でも単独行動は危険であった。女性も男装したり帽子で顔を隠したりしたが、やはり男性の付添いがなければ外出はできなかった。戦後すぐのころには、女性で丸刈りにする人が多かった。もちろんソ連兵に乱暴される危

険を避けるためではあるが、そのかっこうで背中に赤ん坊をおんぶして歩いている姿は、どう見ても様にならず、坊主頭になったからといってどうにも男性には見えず、恐怖心の現れとは分かるが笑えない姿であった。

このころ私は黄痘を患った。顔色も目のなかも真っ黄色になった。慌てて病院に行ったところ、黄色い患者がたくさんいたのには驚いた。病院の話ではストレスが原因とかであった。

春になったころ、このような避難生活の状態のなかで、映画を見たことを思い出した。日本映画の「勝利の日まで」と、アメリカ映画の「オーケストラの少女」であった。敗戦後に「勝利の日まで」を見たという変な感じと、「オーケストラの少女」の音楽の素晴らしさに、何もかも忘れて見入っていたことなどを覚えている。このころになると、演芸のショーのようなものも興行されていた。終戦間際に満州に慰問にきて、そのまま帰国できなくなつて、生活のために舞台にあがっていたら

しい。有名な俳優や、小唄の名取りなど、今でいう寄席のような舞台であったことを覚えている。

昔、「女だけの都」というフランス映画を見たことがある。確かベストテンの一位か二位にランクされた名作である。筋書きは、ナポレオンの軍隊が村に入ってきてこれを無事に通過させるため、男性を隠して女性だけで知恵を絞る話であるが、これはフランスだから通ることで、実際にはあり得ないことと思っていた。しかしソ連軍が入ってきてまだ間もないころ、真っ先に社交場が開かれたとかで、和服姿に着飾った女性が出勤する姿を見て、その度胸に驚きもし、敬服もした。この女性たちのこの時期の行動は、あの映画そのままではないかと思つづく思つたが、映画が作り話ではなかったことを納得した。この女性たちのおかげで、一般家庭の女性たちは随分助けられたことと思う。この女性たちと親しかったゲ・ペ・ウのおかげで暴徒も近寄れず、ソ連軍が引き揚げるまで全く事件は起こっていなかった。

父のメモに、「昭和二十一年一月十日東北保安司令長官司令部日僑俘管理処が設置され、北満方面より奉天に集結する難民の救済とその引揚準備が始まる」とあった。引揚げの話が年明けから動き出した。このため家では何を持って帰るか、どういう風にして持つて帰るか、などについて話し合いが行われた。リュックサック一つを作るにも、母の着物の帯をほどこいて帯芯で作ったが、必要なときには再び帯として使えるように苦心を考えて縫ったものだった。薄暗いランプの灯りの下で毎夜の作業が繰り返された。

旧隣組をまとめて作った各班ごとに、帰国者登録名簿、ついで退去証明書が作成され、さらに班をまとめた引揚隊の編成など、様々な手続きが行われた。私は父と一緒にその事務手続きを手伝った。退去証明書には、従来からの居住者は地区ごとの一連番号がついた三センチメートル角の顔写真を撮って貼付しなければならなかった。その上、途中からこの組に入ってきた人たちをどう扱うか

という難しい問題があった。この混乱のなかで、証明書を作るにも身許の確認をする手だては何もなかった。だれしも一日も早く帰りたい気持ちに変わりはなかったから、引揚げの順序をどうするかを決めるのは、簡単なことではなかったと記憶している。

五月三十日、われわれ平安分区全員と開拓困難民の一部に引揚げ命令が出て、六月二十日、持てるだけの荷物を持って住み慣れた我が家に別れを告げた。日本に帰る日を待ちこがれていた私は、何の未練もなく嬉しさいっぱいであった。残した家財はすべて父の知人の中国人に処分を頼み、馬車で集合場所の北奉天へ移動して一緒に帰国する人たちと合流、団を結成した。夕刻には無蓋貨車に乗せられて、葫蘆島コホロウに向け帰国の一步を踏み出したのである。六月下旬ともなると相当の暑さである。にもかかわらず下着から服まで夏冬ものができるだけ着込み、一番上等の靴を履き、帯しんをほどいて作ったリュックサックの底には一番上

等な和服を入れて背負った。そのほかに当座の食糧も持ったのだから、全財産を体一つにまとめて運ぶようなもので、汗まみれになりながらこの至難の業をこなした。一体何キログラムあったのか、今あの荷物を運べと言われたら、歩くどころかおそらく立ち上がることもできないであろう。

貨車の中では、途中襲撃されるかも分からないので頭も出さず、マッチの灯りでも絶対につけないように注意を受けた。襲撃こそなかったが、途中二、三度停車したときはさすがにぞっとした。幸いにも雨にも遭わず、翌日の昼過ぎ錦州に着いた。この収容所は以前どこかの会社の社宅らしい建物を利用したもので、周囲には柵が巡らしてあった。家といっても、ドアも窓ガラスも畳もなく、柱と屋根だけの家であった。ここでの食事はよく覚えていない。多分共同炊事ではなかったかと思うが、柵の周りに中国人の物売りがひしめいていて、おにぎり、ゆで卵、ゆでた玉蜀黍トウモロコシやまんじゅうなどを売っていた。私たちは一人千円しか

持ち帰れないので、余分のお金はここで使うほかなく、この際とばかり惜しげもなく散財し、思いっきりこれらを買って食べた。

六月二十五日に乗船と決まり、朝、葫蘆島へ出発した。岸壁には日章旗を掲げた七千トンの貨物船「日昌丸」が既に横付けになっていた。久しぶりに見た日の丸に胸が熱くなったが、目の前にいる船にたどり着くまでには長い時間がかかった。大きなリュックサックを背に、両手には抱えきれないほどの荷物を持ち、両側に着剣した小銃を持った中国兵が並ぶ中を、炎天下を一列に並んでのろのろと歩き、首実検されながら宝石などを隠し持つていないかと化粧品の中までかき回されるのである。不法所持が分かれば、その隊は全員が足止めされるとあって、みんなは緊張していた。この列で靴を脱がされた者もいたし、時計を外させ置いて行けと言わぬばかりにされた者もいたが、ここでトラブルを起こせば全員の乗船も危うくなると考え、涙をのんで置いてきたという人もいた。

炎天下の中を歩かされた上、背負った荷物が重く、自分では立ち上がれない人が多かったが、お互い助け合って這うようにして舷側にたどり着き、タラップを見上げた。甲板に並んで迎えてくれた乗組員の皆さんが、口々に「ご苦労様」と声を掛け、手を伸ばして引き上げて下さった。手を取られ、引き上げられて転がり込むように甲板を踏んだ途端、腰が抜けたように座り込んでしまった。だが、船尾に翻る日の丸を見たとき、「ここは日本だ、もう大丈夫だ」と心から思った。このときほど日の丸の有り難さを感じたことはなかった。

日昌丸はまもなく出航し、鹿児島に向かった。黄海沖に差し掛かったとき、何人かの水葬が行われた。もう少しで日本だというときにさぞ残念であるろうと思った。やがて開聞岳が見えて錦江湾に入り、桜島の前に停泊したが、病人がでた関係で三日間を洋上で過ごし、天保山栈橋に上陸したのは七月五日であった。鹿児島に引揚船が入ったのは珍しいということを知った。DDTを白くなる

ほど浴びせられて、それぞれの落ち着き先までの乗車券をもらい、鹿児島を後にふるさとへと出発した。

終戦前後から引揚げまでの記憶を頼りに、あらましを書いてみたものの、何しろ五十九年の歳月に、肝心な所が定かでなかったり、そのころの毎日毎日懸命に暮らし、決してなおざりにしていたわけではないのに、細かな一つ一つを思い出せないとは一体どういうことだろう。日本に引き揚げたことをすべての目標にして暮らしていたから、それ以外のことはさほどに思っていなかったのかもしれない。当時、私は数え年二十歳になったばかりであった。およそ青春とは縁のない日々であったが、若かったお陰で終戦から引揚げまでの危険と背中あわせの経験も、それから先の苦しい生活のなかで生きてゆくことの原動力になったような気がする。若い者はそれなりに切り替えも順応もできるが、長年の苦労の結晶をわずか現金千円以外はすべてを捨てて、着の身着のまま故郷に

帰り、これからの生活に肩身を狭くして暮らさなければならなかった両親の胸のうちはいかにばかりであったか。「故郷は遠くにありて思うもの」と言われているが、老いてゆく両親にとっては決して安住の地ではなかったと思う。身を寄せ合って共に苦労を分かち合ってきた両親の老いゆく姿を見ることは本当につらく、無力な自分が情けなく暗い日々が続いていたある日、ふと何もかも捨てて、未練もなく帰国の旅に出たあのときのことを思い出した。あのときのことを思えば何でもできる。もう時間がない。今決断しなければ後悔するだろうと、無謀にも故郷を飛び出した。激しい都会の流れの中での生活は決して楽ではなかったが、つらくとも耐えてこられたのは、やはり特異な経験が身に付いていたのだろうと思う。両親を引き取り、そして見送って、私の戦後も終わり近くなってきた。厳しい戦後の人生の始まりである終戦と引揚げを思うとき、妙な懐かしさを覚えるのである。